
accidental overlapping ~偶然の重なり~

あーずにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

accidental overlappin り～

【Zコード】

Z0804Y

【あらすじ】

俺は、偶然、というか殆ど奇跡で超難関高校に入学し、偶然校門前で出会った奴を助け、そいつが偶然同じクラスで隣の席。あげくの果てには、携帯の機種まで同じだった。

そんな偶然が重なり、いろいろな人や物、運命まで巻き込みながら、偶然にも今、俺と藤和は、同じ場所に立つて生きている。

完全オリジナルです！
見ていただけるとうれしいです。
オリジナルを書くのは始めてなので、感想、アドバイスなどお願い
しますm(ーー)m

第一話 『奇跡と出会い』

入試で奇跡が起ると思つか？

普通は絶対に起きない、ってか、起きたらヤバいを通り越して笑えるよな。

でも、起こつてしまつたのだ。

三年前、東京、愛知、大阪の三県で、試験的に導入した入試の方法があつた。

『マークシート受験法』ってヤツだ。

それを採用した理由は、出来るだけ多くの問題を短時間で出し、それをどれだけできるかっていう内容だ。

なぜそんなことになつたかというと、同じく二年前に創立された、『国際選抜職業実践型高等学校』通称国選高、だ。

その学校は、全世界の中でも初めての試みで、実に先進的なものであつた。

普通の高校は、仕事に就くために勉強する。

が、この学校は実際に仕事を実践し、その職についてのプロよりもの存在になること（野球で言えば、メジャーリーガーだ）これを目指している。

三年前、できた当初は『国際職業実践型高等学校』という名称で、倍率は40倍をオーバーした。

そのせいで、採点の時間がかかり、他の高校への受験者の激減が起つた。

そのために打ち出しが、『受験者を点数の高い順からドラフトすること』だった。

ちなみに定員は80名だ。

話を戻そう、それで、俺に奇跡が起きたってのは、この超ヒーリート高校に選ばれたことだ。

ちなみに、俺はある一教科以外は全て平均点から - 20だ。

そんな俺が受かった訳は、マークシート受験法なるヤツのせい。

4択の問題を、わからず適当に書いたら、正答率が95%を超えた。

俺の勘も捨てたもんじゃないらしい。

まあ、いいことなんだろうが、俺は少し迷惑している。
コースが始まれば、堂々と合格した80名の名前が出来る。（人権侵害とかいうやつにあたらないのか？）

学校へ行けば、校門にでっかい横断幕がある。
クラスに入れば、女子からの質問攻め + 男子の冷たい目。
なんかどこぞのスター様の気分だ。

決してちやほやされるのが嫌なわけではない。
目立つのが嫌なんだ。

俺は普通の人生を普通に生きて行きたかったのに…。
かと言って、この卒業したらエリート確定の高校に受かり、それを破棄することは世間的に無理だ。

だから、俺はこの高校に進学した。

申し遅れた、俺の名前は立川昂
たちかわすばる

。国語の成績以外全て悪く、顔は中の上、スポーツもまあまあできる。
身長も178cmとまあまあ高い。
まあ、こんなところだ。

特に特徴などない、ちょっと背の高い普通の一男子高校生と思つてくれればいい。

ただ、特徴があるとすれば…女子が苦手ってことかな。

だから、目立たないで、いつかは気の合う人とであつて、子供作つて、ひつそりと暮らしていきたかった。

…だが、それも無理そうだ。

今、俺の目の前には、無数の記者たちがかシマウマに群がるハイエナよろしく、150cmの小柄なボニー・テール娘に群がる。マイクやECレコーダーを様々な場所から押し付けられて、苦しそうにしているそいつを、なにを思ったのか俺は、人間が苦手な上に、そいつが女子だつてのに、助けようとしたのだ。

「よう、お前もこの学校だつたのか、行こうぜ。」

記者の間を割つて入り、ポニテ娘の手を引いた。

最初はわけが分からぬような顔をしていたが、俺の意図を理解したらしく、話を合わせ、記者の群れから抜け出した。

「別に…助けてくれなくても良かつたのに。」

「迷惑だつたか？」

「そういうわけじゃないけど…。」

こいつ、体は小さいくせに、余計な意地をはるらし。

「なら、いいだろ。」

やつぱ人と話すつてのは疲れるな。

特に異性なら二倍疲れる。

ポニテ娘が、何か思いついたように顔を上げた。

「あんたつて、どつかの社長の子供だつたりするの？」

「そんなわけない。どこにでもある家庭の長男だよ。」

「つてことは、あんたつて立川…昂？」

「な、なんで知つてるんだ？」

この学校に入学するつてことと、さつき社長の子供とか聞いてきたから、国家機密のデータベースにでも入り込むことができる家柄な

のか？

「なんでって、ツイッターとかフェイスブックよ。あんたとあたし結構騒がれてるわよ。」

「な、なぜだ？」

「一般家庭から受かつたからよ。この学校の生徒なんか、授業料のたつかい塾とか、家庭教師とかに毎週40時間くらい勉強教えられてる、金のある社長とかそいら辺の子供ばっかよ。」

「そ、うなんか……。つてことは、あんたも一般家庭なのか？」

「そうよ。父親が中小企業の課長やつてる、ありきたりな家よ。ていうか、あんたつてよばれるとムカつくわね。」

お前も俺のことあんたつて呼んだじゃねえか。

「じゃあ、なんて呼べばいいんだ？」

「藤和亜美

とうわあみ

。

「藤和な。分かつた。」

「それでいいわ。早くいがないと遅刻するわよ。」

携帯のディスプレイを俺に見せる。

「そうだな。」

そういうつて横を向いたときには、藤和はもういない。

「早くこないとおいてくわよー！」

つたぐ、入学早々変な奴に会つちまつたもんだ。

どうせめがねをかけたやつばっかなんだろ、と思つたが、そういう奴は5割くらいで、机に突つ伏してゐる奴が2割、鏡をみてせつせと髪をなおしてゐる奴が2割、残りの1割は普通に話してゐるだけだつた。

（俺の席はどこかなー、つと。）

俺の席はなんと窓際の一一番後ろ、なにをするにしても最高のポジションだ。

ほんわかした気持ちでスクールバッグを机におく。

「あら、あんた隣なの？」

「え、ああ。そうみたいだ。」

「ふーん。隣で変なことしないでよ。」

さつき会つたばっかなのに俺のなにが分かる。

「あ、そういうばあ、メアドと番号教えてよ。あたしこうこうう奴ら苦手なんだ。」

前のめがねをかけた真面目ちやんたちをみて、「うえー」と口を出してみせる。

「分かった。はい。」

僕は携帯を出して、藤和の方へ向ける。

「なに、くれるの？」

「赤外線だよ！」

ああ、そう。と言ひて、藤和も携帯を差し出す。

「あ。」

二人の声がそろつ。

同じ機種だったのだ。

偶然にも。

「ま、まあ、これ結構人気モデルだし、かぶることもあるわよね。」

「あ、ああ。それより早くしないと先生くるぞ。」

ピロリーンと赤外線を終えた合図が聞こえた。

顔を上げると、長いまつげに少々切れ目の気の強そうな目。整った鼻に桜の花びらのように鮮やかなうすいピンクの唇。さつきは気づかなかつたが、こいつは相当美女だ。

「……なにみてんのよ。」

「い、いや、何でもない。」

声をかけられハツと我に返る。

「そんなんぱーつとしてると、教師に田つけられて宿題増えるわよ。」

「あ、ああ。」

きつい言葉をかけながらも、少し心配してくれるのはこの日の優しさだろうか。

少しすると、教師が入ってきた。
どこにでもいそうな奴だが、言ひことがなんか難しい。
国語力があつてよかつたぜ . . .

「ちょっとといいでですか？」

「え、あ、はあ。」

「私、吾妻誠一

あがつませいいち
と申します。」

「吾妻くんね。よろしく。」

吾妻つて、たしか日本で普及率NO.1のウイルス対策ソフトの会社の代表取締役の名字じゃなかつたか？

「それで、あなたは立川昂さんですよね？」

「ああ、そうだよ。ていうか、敬語じゃなくていいよ。堅苦しいし。

「はあ、そうですか。」

「うん。それで俺になんか用かな？」

「あ、すっかり忘れてた。こっちから話しかけたのに」めんね。」

この学校は天然が多いのだろうか？

藤和も天然ぽかつたし。

「それで、あの、よかつたら、僕と友達になつてほしいんだけど . . .

「あ、いいよ。とりあえずメアド交換しようか。」

俺がそういうと、吾妻はほつとしたような顔をした。

「吾妻つて聞いただけで分かつたでしょ？」

「ああ、あのウイルス対策ソフトの。」

「うん。この学校に来る前は、なるべく普通の生活がしたくて、公立高校に通つてたんだ。でも、お父さんが有名だから、みんなに一眼おかれ、まわりに誰もいなかつたから……。」

「そりなんだ。大変だつたね……。」

どうやら、金持ちも金持ちで大変らしい。

「あ、それじゃ、また後で！」

「あ、おう。」

あいつとは話しても疲れなかつたな。
気が合う奴なのかもしれない。

そして、一限の授業が始まつたとき、俺はそのカリキュラムに絶句した。

第一話『奇跡といふこと』（後編）

感想いただければ幸いです。

第一話『衝撃の寮生活』

「な、なんだよ、これ…」

「このカリキュラムはどうやら極端に普通の高校で行う授業が少ない。」

殆ど『実践』と書いてある。

みんなあんぐりと口を開ける中、教壇の教師が口を開いた。

「入学前にお知らせしましたが、この高校では、定期テストは行いません。」

…は？

多分この瞬間、名前も知らないクラスのみんなの心が、一つになつたことだろう。

「その代わり、年に4回行う実践型のテストをします。」

その言葉と同時に配られたのは、普通の高校にありそうな学科が書かれた紙だった。

「皆さんには、この中からどれでもいいので、一つ選んでもいい、それに関したテストをします。」

隣の席から椅子が動く音がした。

「あ、あの…どういう形式で行うのでしょうか。」

俺の隣のやつとは、気が強くて多分このクラスで一番かわいい、長めのポニー・テールの女子だ。

「藤和さん…でしたね。それは、実際の企業に行き、そこの従業員の方と同じことをしてもらいます。そこで、我々教師がどれほどできているか、判断し、できていなかつたと判断した場合は、補修となります。ちなみに、3回失敗したら、退学です。」

おいおい、そんな怖いことをサラッと言つなよ。

「でも、心配する必要はありません。この学校には専門の資格を持つ教師がいます。ちなみに私は調理専門です。」

そういうと教師はポケットから、調理師一級の免許をとりだした。

そのほかにも、製菓系など、いろいろとあった。

「それと、入学式はありません。その代わり、寮の準備をしてください。」

入学式もないってサラリと言いやがつた。

この高校は何かおかしい、と思つのは俺だけだらうか？
「寮は、世田谷にあります。」

えーと、ここが渋谷だから… そんな遠くないな。

「通うときは、支給される車を使ってください。」

「は？」

免許は？

と思つたが、みんなさほど驚いていない。

「おい、藤和。免許はどうなるんだ？」

「本当にあんた何も知らないのね。この学校、最初の一ヶ月は普通自動車、大型バイク、クルーザーの免許取らされるのよ。」「ぐ、クルーザーまで…。」

「どんな仕事でもできるようにだつてさ。でも、クルーザーは殆ど使わないって。あと、2年になつたら小型飛行機の免許もとるらしいよ。」

やつぱりこの学校はおかしい。

「それと、寮は男女混合、三人で暮らしてもらいます。」

おい、何ていつた？

年頃の男女を、同じ部屋に置くつもりか？

さすがにこれには、クラス全体にざわめきが起つた。

「それでは、説明は以上です。寮の部屋割りは決まっていますので、今から配る部屋に行つてください。」

そういうつて教師は1人ずつ、紙を配り始めた。
俺は8-1-2号室らしい。

そして、下にある8ケタの番号は、オートロックだらう。

「あ、言い忘れましたが、明日は学校がありません。家具などをルームメイトと買いに行つてください。それでは、さよなら。」

クラスにしばしの沈黙が現れる。

沈黙を破ったのは、吾妻が席を立つ音。

「た、立川くん、行こう?」

「あ、ああ、そうだな。」

「あたしも行くわよ。いいわよね。」

「あたしも行くわよ。いいわよね。」

寮に向かう電車の中は、すうぐ寂ますい。

幸い中途半端な時間なので、座席はかなり空いていた。

「あ、あのさ。あたし、藤和亜美。あ、あなたは?」

「いっ、俺のときはあんたって言つたのに…。」

話かけられた瞬間、針で突かれたように跳ね上がる。

「あ、ぼ、僕は、吾妻誠一。よ、よろしくね?」

「う、うん、よろしく。」

始めて付き合つた中学年のカップブルのよう、ぎこちない。横目で笑つてはいるが、後ろから蹴りが飛んでくる。

「吾妻君は、あんたと違つて品があるから緊張したのよ!」

そういつて藤和は少し着崩したブレザーと、アイロンとワッカスで整えた髪を順々に指差す。

「これでもゆるいほうだぞ?田黒の学校前行つてみるよ。」

「ば、ばかにしないでよね!そんなん知つてるし。」

どうやら知らなかつたらし。」この中の中学は相当平和だったのか?

「でも、お前だつて…」

藤和の胸元のネクタイを見下ろす。

「え? ! べ、別に黒でもいいじゃない…」

飛び上がるよに座席から立つ。

黒つて、なんだ?

「なに勘違いしてるかしらんが、俺はそのゆるんだネクタイのこと

を言つたんだが。」

俺がそういうと、藤和はあーっと顔を赤くし、ゆるんだネクタイを直し、これでいいでしょ、と言ひ顔をする。

「てか、黒つてお前、ブラ…うつ！」

「ブ、と言い始めたときから、藤和の右腕は俺の腹をロツクオン。いい終わる前に俺の腹をえぐつた。

「そうゆうのは、分かつても言わないもんなの！ほんとデリカシーないわね。だからもてないのよ。」

会つてから半日でもてないつて分かるのか。

大した直感力だな。

ていうか、正直いうと、もてたくはないからな。

女子は苦手だ。

「うるせえな。」

「女子だからつて甘く見えてると、痛い目にあつわよ？」

藤和は右腕を振り回す。

また殴られたらたまつたもんじやない。

「悪い悪い。冗談だ。許してくれ。」

「わかればいいのよ。わかればね。」

そういうて椅子に座つて勝ち誇つたよつな顔で、俺を横目で睨む。

「ねえ。」

「ん、どうした？」

吾妻が俺の肩をたたいた。

「藤和さんとは、前から知り合いでしょ？」

「いいや、今日あつたばつか。」

「へえーーすごいね…。あんなに仲良くなってるから、知り合いかと思つたよ。」

勝手に馴れ馴れしくされてるだけなんだが。

「僕は…女人の人と話すの苦手でさ。」

「ああ、俺もそうだぞ。女子は苦手だ。」

「え！じゃあなんで藤和さんさんとあんなに仲良くできるの？」

「それは、あいつが…」

あいつが、なんだ？

特に理由もないのに助けて、流れでメアド交換して、今は一緒に寮に行く電車乗つて。

自然に友達みたいになつてたな。

吾妻が俺のことを不思議そうな目で見ている。

「まあ、今度話すよ。」

「えー、今教えてよ！」

「あんたたちうるつさいー 電車の中くらい静かにしなさいー！」

「「はい…。」」

まあ、結果的に一番うるさかったのは藤和の声なんだが…。

電車を降り、駅から徒歩5分。

世田谷の住宅街でもかなり目立つ、15～20階建てだつてのにデザイナーズマンションっぽい。

中にはいると、20mはあるだろう、厚い防犯ガラス。オートロックの8ケタのキーを正確に打ち込み、エントランスに入る。ブランクで統一された自販機が6台くらい置いてある40m×50mくらいの、広い空間。

「これは…もう寮つていうレベルじゃないよな？」

隣で豆鉄砲を食らつた鳩のような顔をしている藤和を見下ろす。

「そう、ね。これで寮費込みで月10万なんだから、大したもんね。」

「まあ、一応国家プロジェクトだしね。」

吾妻はさほど驚いてはいないようだ。

「そ、そうだな。とりあえず部屋行こつか。」

エントランスの向かって右側にあるエレベーターに乗り込む。

「あ、僕4階だから、降りるよ。じゃあね！」

「おう。」

エレベーターは無音で上がつて行く。

「なあ、お前何階？」

「お前ひて言わないで。」

「めんどくさいやつだ。」

「…藤和は何階だ？」

「8階よ。ていうか、8階のボタン押してるんだから気づくでしょ。」

「…ああ。それもそうだな。」

でも、こいつは8階のボタンなど押していない。

押したのは俺だ。

それに気づいたらしい藤和は…

「あんたも、8階ね。」

「ああ。」

まさか、とは思うが、こいつと部屋が一緒じゃなかろうな?
二人で、8階に降り、ホテルのよくなきれいな廊下を歩く。
801、802と、どんどんと部屋を通りすぎていく。
そして藤和は、810の前で止まり、俺のほうへ振り向いた。

「まさか…」

「お前…」

「「同じ部屋?!」」

おいおい、まじかよ。

一応確認しよう。

「俺は、812だ」

「あ、あたしもよ」

偶然にもほどがある…。

第一話『衝撃の寮生活』（後書き）

次回は一週間以内に更新したいと思います。

第二話『女』理解不能

「」もでぐると、誰かの陰謀じやないかとも思つてしまつ。
「ん、まあ、とりあえず入つてみるか」

「そ、そうね」

お互に油の切れた歯車みたいに、会話から歩行までぎりぎりない。
「それじゃ、開けるぞ」

「うん…」

力チャ、とニアがあく。

「うわあ、すこい？」

声をあげたのは藤和だ。

この部屋、なんと言つても広い。

リビングは1-2畳以上ある。

それに加えて、8畳の小部屋が4つ。

キッチンはステンレスのシステムキッチンだ。

ただ、残念なのは家具がないこと。

冷蔵庫、電子レンジ、テレビ、パソコンなどはあるのだが…

タンスやテーブル、そういうたものがない。

リビングは洋風だが、個室は洋風が2部屋、和風が2部屋だ。

俺は畳が好きだから…和風にしようか、などと考へてみると、ガチ

ヤ、ヒドアの開く音がした。

顔だけそちらにむけると、165くらいの身長に、畳ゆめの茶髪（
ライトブラウンつて言つのか？）を

背中の3／1くらいまでのばしている。

顔は大人っぽく、前髪は目にしつかりとかかっている。

「えーっと、君が同部屋の人かな…？」

「う、うん。よろしくね…」

…なんだこいつ。

はずかしがつてんのか？

顔が真っ赤だ。

「おう、よろしくな」

キッキンをチェックしながら顔だけ向けて言ひ。

「お、お邪魔するね」

これから自分の部屋になるつてのに、他人の家に入るみたいだ。

「ねー、お腹すいた…」

トイレに入つていた藤和が出てきて、俺以外のルームメイトと鉢合わせる。

「あなたが、葉山みい『はやま』さんね？」

なんで知つてんだ？

さつきTwitterみたが、こんな情報どこにも無かつたぞ。
疑問に思つてゐる俺の気持ちを察したらしく、「玄関のプレートに
書いてあつたわよ」と。

見にいくと、上から順に、俺、藤和、葉山の順に書いてあつた。
そして、俺のところには“室長”と…つて室長？！

「なんで俺が室長…」

「知らない。多分適任よ」

適任つて、その根拠はなんだ。

自分がやりたくなかつただけだろ、顔にやついてるだ。

「なあ、室長つて何をするんだ？」

「多分…何もしないわよ。ただ、この部屋で起きたことの全責任は
あんたにあるつてことね」

得意氣な顔で言つ藤和を見て、それくらい知つてゐよ、と言つたくな
る。

「…何も起こすなよ」

「……お腹すいたから、買い物ついでになにか食べにこましょー」

あつ！無視しやがつた…

何か起こすつもりか？

何か聞き出そうとしたが、藤和はすでに、はわわ…と震える葉山の
手を取つて玄関前にいる。

「ねえ、あんたもきてよー。」

「え、え、あ、うん」

「何慌ててんの？荷物持ちよ」

…少しでも期待した俺がバカだった。

あれ、でもなんで期待したんだ？

女は、苦手なはずなのに。

…いや、考えるのはよそ。

最近よくあることだし。

ということで半ば強引に連れ出された俺は、藤和に言われるがまま、ホームセンターへ向かった。

まあ、定番だな。

家具つて言つたらここだろ？。

だが、藤和がそこで買つたのは大きめの台車2台のみ。

「おい、テーブルとかは…」

「はあ？こんなところで買つわけないじゃない。雑貨屋さんでかわいいやつ買つのよ」

部屋なんてほとんど見られないんだから、なんでもいいんじゃないのか？

これだから女つて生物は分からん。

「で、なんで台車？」

「かわいい家具を運ぶためよ」

「配達でいいんじやないか？」

「い・ま・す・ぐ置きたいのー。」

そんな強調しなくても…

それから、台車2台を持たされたまま、電車に乗つて渋谷へ。

そのとき、客からどれだけ変な目で見られたかは、言つまでもない。渋谷についてからは、少し歩くとこので、台車を押したままなので、通行人からまるで裸で歩いているかのような羞恥プレイを受けた。

「いいよ

着いた先には少し小洒落た雑貨店。

男が一人で入れないピンクの店内に、台車2台を持って入れつてか？
入り口に立ち尽くす俺を、藤和は無理矢理中にいれる。

「いらっしゃーませ」

ほら、あの店員引いてるや。

横を見ると葉山が小さく笑つている。

俺の視線に気づいたのか、ふつと顔をそらす。

その瞬間、ふわっと前髪が目から外れる。

そこに見えたのは、大人っぽい口や鼻とは反対に、子供っぽく、かわいらしい目が見えた。

「わ、私の顔になにかついてますか？」

「い、いや、なんでも」

照れ隠しに天井までピンクなこの店を見回した。瞬間、藤和が何枚かのカードをもつてきた。

「なんだそれ？」

「家具の番号よ」

ひらひらと7枚くらいのカードを見せる。

「早いな…葉山はどうするんだ？」

いまだに顔が赤い、葉山を見下ろす。「じゃ、じゃあ、私もいつてくるね」「おう」「うう」

．．．しばしの沈黙が続く。

その間藤和はずつと俺の顔を見ついて．．．

「なあ」

「ねえ」

嘘、はもつちましたよ。

無駄に気が合つた、こいつとは。

「おまえから言えよ」

「う、うん。じゃあそつする。あのさ、わざわざこちやんと何話してたの？」

みいつて．．．ああ、葉山のことか。

「別に . . . てか、俺が何話そりがおまえには関係ないだろ？」「うん、そう。あなたの言うとおりなんだけど、あたしだけ、仲間外れにされるみたいで . . .」「ああ、そうゆうことか。

葉山に嫉妬してるかと . . . っていうか、嫉妬する理由がないじやんか。

何考えてんだ、俺。

がしがしと頭をかく。

「話してたつづーか、葉山に少し見とれてただけだよ」「ほかに言ひよがなかつたんだ、仕方ないだろ？

「へ、へえ。そつか、そうだよね。あんたも男だもん
当たり前のことをつぶやき始めたので、顔を上げて葉山を待つことにする。

「おい」

「なに？」

「これもつて、電車乗れつて？」

「なに、歩いて帰るつもり？」

「だめだ、こいつには何いっても無駄だ。」

「はあー、疲れちゃつた。外食する予定だつたけど、家でゆつくり休みたいから材料買つていきまよ」

立ち尽くす俺はガン無視、俺のことを空氣か煙みたいに思つてるんだろうか？

かといつて放り出すわけにはいかないので、おとなしくつこといいふ情けない俺だつた。

第三話『女=理解不能』(後書き)

感想よろしくお願ひします m(—)(—)m

第四話『一度目の買い物』

といふことで、適当に買い物して帰ってきた。

ちなみに、俺の精神はズタボロ。

電車の中で、女子高生に「なにあれ？！」とか言われて「写真」とられて、数分後にTwitterのトレンドのところに『変態』つて名前で俺の写真載つてたぞ。

今日の前にいる藤和に、「バー カバー カ、死んじゃえ！」なんて言つてみたい気もするが、倍返しに返つてくる」と聞違ひなしだ。
… てか、子供っぽいな、俺。

にしても…一番心配なのはこの生活をやつていけるかどうかだ。
爆弾（藤和と葉山）がいるこの火薬庫で、俺はその一つの爆弾に火をつけずに過ごせるのだろうか？

もちろん、自然に爆発することもあるんだろうが。
てなわけで、部屋に戻り、俺はリビングの家具の設置を始めた。
まあ、テーブルを組み立てるだけなんだが。

「藤和！」

「なに？」

「ソファーはどうすんだ。リビングにせめて一つはほしいぞ」「それもそうね…午後から買い物に行きましょ。どうせ暇でしょ

「まあな

「ついでに、あなたの家具もよ。あたしもついて行つてあげる」

「お、おお、そうか。ありがとな」

「…別に。今日付き合つてもうつたし、そのお礼と思つてくれれば

いいわ」

「おう」

… いつも正直じゃないな。

素直に手伝うつていえばいいのに。

もう作業が終わつてしまつた俺は、横になつてお昼の定番番組を

見ていた。

「ははつ」

某芸人のバカな素振りに笑ってしまったのが運のつか。
げし、と背中をけられる。

「あんただけ休憩？ 大層なじ身分ね」

「だ、だつてよ。やること終わつたし」

「それじゃあ昼食でも作りなさいよ。それくらじでできるでしょ
俺はその言葉を聞いた瞬間、すくつと立ち上がり、藤和のほうを
向いた。

「ふふ、それくらい朝飯前や」

実は、料理はまあまあできる。

「は？ 何言つてんの。朝飯じやなくて昼食を作れつて言つたのよ」

「いや、そういうわけじやなくて…」

「アホらし。やつをと作つてよね」

そういつて自室へと戻つていく。

なんだよ、ちよつとくらじい俺のことを聞いてくれたつていいじや
ないか。

自慢なんて、生まれてから数回しかないぞ。

まあ、こんな不満を言つてる俺だが、今思えば、小、中学生のこ
ろの俺にとつては、こんな生活は夢だつたのかも知れないな。

あのころの俺は、学校が終わつても友達と遊ぶこともなく、まつ
すぐに帰つていた。

もちろん、部活になど入つてもいない。

理由は、度重なる父親の転勤と、小1のころに死んでしまった母
親のせいである。

仲良くなつた奴もいたが、それは稀だ。

転校してきた一週間の間はちやほせられたが、それ以降はいつも
通りの生活に戻つたようだつた。

こんなにも人は早く自分から離れていくのか、そう思つた。

母親が死んだのは、ショックだつた。

家に帰つてもずつと一人きり。

しばらくすると、むしろ一人のほうがいい、そう思つてしまつた。

中学に入つてからは、モテた。

つらやましことだと思つだらう、だが違つた。

告白されたのはうれしいことだつた。

でも、クラスの男子から「なんであいつだけ……」といつて見られたらしく、ハブられた。

女子と仲良くすればよかつた、のかもしれない。

だけど、そのころから女子は苦手だつた。

話しかけられても、「ああ」とか「うん」とか会話とは呼べない会話しか続かなかつたのだ。

結局、俺は3年間ひとりだつた。

……いや、一人だけ、ともだちができたな。

その話は、またあとにしよう。

なぜなら、後ろで藤和がとがつた犬歯を剥いているからだ。

「はいはい、いまやりますよ」

「えつ、氣づいてたの？」

「隠れてるつもりだつたのか。足音でわかつたぞ」

「どす、と腰にパンチが入る。

「なんで俺がなぐられるんだ……」

「あ、あたしが太つてて、足音が大きいつて言いたいの?...」

「誰もそんなことは言つてない。

「違うつて……。ていうか、お前は十分瘦せてると思つべ

「え、ええ、そう?」

「ああ、もちろん。嘘つくわけないだらう」

「あ、ありがとうね」

「なにも感謝されるようなことは言つてないぞ?」

「あれ、なんかこいつ赤くなつてる。

「よ、よくそんな恥ずかしいことポンポン言えるわね

「こいつはなにを勘違いしている?」

よくわかるぞ…

「まあな。じゃあ昼飯つくるかな」

「…」この時は適当にあしらつておくれのが一番…だろ？
適当に…焼うどんでいいだろ。

簡単だし、そんな手の込んだ料理はしたくない。

「わ、すごい…」

「うおっ！葉山か。どうした」

いつのまにか俺の横にいた葉山に驚く。

「私、料理作れないから、すごくなつて思つて」

「別に、まあこれくらいはな」

葉山がずつと隣で見るので料理じづらかったが、一応できた。

「ほんとだ…あんたほんとに料理できるのね」

「まあな」

適当に昼食を食べ終え、俺と藤和は出かけることにした。

「葉山は来ないのか？」

「うん。まだ部屋の準備終わってないから…」

「そうか。じゃあ行くぞ、藤和」

「あ、うん」

「…」と、いうわけで外に出たのだが…

「…」どうも、女と一人つきりつてのは気まずいな。
話題が思いつかない。

「ねえ」

「ん、なんだ？」

「さつきからあたしたち見られてない？」

「誰に？」

「通行人に」

「まあ、確かにな…」

「下にいる藤和を見下ろすと…」

「お、お、こいつ、ブラが…透けてる。」

「なによ、変な顔して」

「お、お前…」

「なによ、はつきりいいなセイよ」

「ブラガ…」

「は？こんな時になにいつて

かあああ、と沸騰したように藤和の顔が赤くなる。

「こんの、バカあ！！」

神様、なぜ俺が殴られなければいけないのですか…

この世の不公平さに少し絶望しながら、あたふたしている藤和へ

羽織つっていたパークーを渡す。

「ちょっとでかいかもしないけど、これ着とけ

春らしい青色のそのサイズは、」なわけで…

「だぼだぼなんだけど…」

予想通りだ。

「仕方ないだる…」

そのまま歩くか？と続けて少し冗談を言おつとしたのだが、言えなかつた。

こいつ、かわいい。

なんなんだ、このかわいさは。

なんていうんだろ、妖精みたいな感じかな。

それも、初々しさを感じる。

強いイメージからいつきにふんわりとしたイメージに変わった。

ああ、くそ、うまく言い表せない。

でも、こいつは俺の脳ではいい表せない、それくらいかわいいのだ。

「そ、そんな変？」

「ああ、いや、大丈夫」

「じゃあ、なんでそんなに見てんのよ

「別に…あ、電車来了」

究極のタイミングで来た電車の運転手に感謝し、乗り込む。

「なあ、俺は普通の店でいいからな」

「そつ？ピンクで染めてあげよつと迷つたのに」

「余計なことはせんでいい」

あたしがやつたほうが絶対いいのに…とすねる藤和にくぎ付け。

一応言つておくが、俺じやないぞ、中年サラリーマンだ。

「ねえ、また見られてない？」

どうやら視線に敏感らしい藤和が気になつて仕方ないよつだ。
お前がかわいいからだよ、とは言えるわけがなく、とりあえず中年サラリーマン数人にはにらみをきかせておいた。

すぐに顔をふせたサラリーマンが、「今どきの男の子は彼女を見られただけでにらんでくるのか」「ていうかあれ妹じゃないのか」などと言つている。

いら、そこ、二重に勘違ひするな。

こいつは俺の彼女じやないし、妹なんかじやない。
こんな生意気な妹がいてたまるもんか。

渋谷についた電車に降り、i k e aイケアに行く。

値段も手ごろだし、俺はこんなくらいうどいいんだ。

そこで俺は、白のシングルベット、ガラスローテーブル、間接照明の白のランプを買つた。

部屋は白を基調にするつもりだ。

もとは和室の予定だつたが、葉山にとられてしまつたため、洋室にすることにした。

「お届けは一週間後になりますがよろしいでしょうか」

「あ、はい」

「ではここに住所とお名前と電話番号を…」

一通り手続きを終えた俺は藤和をつれ、駅前のビックカメラへと向かつた。

「何買うの？テレビならあるわよ

「パソコンだよ。モバイルノート

「もばいるのーと？」

「んーとな、少し小さめのノートパソコンのことだ

「最初からそいつにはなれこよ」

「あ、ああ。悪い」

「なんで俺があやまちこやいかんのだ、と書いてから思ひ。」
で、買ったのは東芝製、Intel^{インテル}の最新モデルの入ったやつ。
それと、最大100Mbpsの無線ランルーター。

これがあれば無線で楽だからな。

有線ランポートを引いてくるなんてめんどくさいことはしなくて
もいい。

「これで終わり?」

「うん、そのつもつ」

「ねえ」

「ぐい、と俺のセシャツの袖を引っ張る。

「なんだよ、そんな急いだつて物は逃げねえぞ」

「これ、ほしい!」

藤和が指差したのは、空気清浄器。

「空気きれいになるんだよ?...買わないと...」

根拠がよく分からない。

「まあ、リビングに一台あつてもいいかもな」

「でしょ、でしょ?...じゃあ買つちやおつ!」

異様なテンションで箱を抱いで行つた藤和を見送りながら、その
空気清浄器のパンフを見てみると...

『お肌つるおい、美白効果!』

肌はつるおうかもしけんが、美白効果はどうだらうか。
で、買つものは買つたので後は電車で帰るだけだ。

「おい、それ貸せよ」

ようようと歩く藤和にいつ。

「でも、あんたパソコン持つてんじゃない」

「んじゃあ、これでどうだ」

空気清浄器をひょいと持ち上げ、代わりにパソコンを渡す。

「これでいいだろ」

「うん……」

「ふと思つたのだが、なんで俺はこんなもんを女子と仲良くなつてんだ？」

「苦手だつたはずなの。」

「はあー、もうわからんねえ。」

「やつぱし自分の気持ちつてよく分かんねえ。」

「人の気持ちもろくに理解できなかつてん。」

寮の最寄りの駅で降りたとき、藤和が口を開いた。

「立川！」

「お、おう？」

「名字で呼ばれたぞ。」

「ありがとね」

「そんな……感謝されるようなことはしてない」

照れ隠しに少し足を速める。

寮つて、意外といいのかもしれないな。

第四話『一度田の買い物』（後書き）

次回もよろしくお願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0804y/>

accidental overlapping ~偶然の重なり~

2011年11月27日18時54分発行